

亀井勝一郎

日本人の美と信仰

日本人の美と信仰

「仏像と復原力」ということについてまずお話したい。
仏像というものが成立して、それがどういふ状態のもと
に礼拝されてきたか、あるいはどういふふうに見られて
きたか、できるだけ昔のありのままの状態に一応返して
考えてみるということは、すべて歴史に接するときの大
事な態度だろうと思うのです。

その場合二つの能力が必要です。一つは言うまでもな
く、厳密な学者としての実証精神であり、もう一つは詩

人としての豊かな想像力です。

私は、一番先に私自身が仏像というものに心をひかれた、そもそもの出発点からお話ししようと思うのです。

私が初めて奈良を訪れたのは昭和十二年の秋で、三十歳するときです。私の郷里は北海道であり、高等学校は東北で、奈良というものは非常に遠い。何か日本の中の異国という感じが前々からしていたのです。むろん日本の古典というものが成立した、われわれ日本民族にとって魂のふるさたであるということとは、頭の中では理解しておりましたが、実際に自分が行って、そ

のあるがままの姿に接する機会は、いま申し上げましたように学校を出てから後のことであつたわけです。

これは、いまの皆さんはどうか知りませんが、私たち学生時代の教養と学問の方向というものは、大体において、ヨーロッパ文化をいかにして学ぶかというところに重点が置かれていたわけで、これは私の世代だけでなく、明治以後の、いわゆる知識階級というものの主要方向であつたと思います。そして日本人でありながら、自分の国の歴史、自分の国の古典、美術というものに対しては無関心であり、まして朝鮮とか中国とかインドと

か、同じアジア人でありながら、アジアの諸文化に対しては、きわめて冷淡な態度をとっていたわけで、何よりもまずヨーロッパの文化を吸収しなければならぬと思っ
ていました。私自身も学生時代はそうであったわけで、私は学校を出たならば、何よりも先にギリシヤとローマを訪れて、そして西洋文化の一番根源にあるみごとな造形と文学に触れたいというのが、自分の青春時代のあこがれであったわけです。

私は学生時代はドイツ文学をやりましたから、ゲーテの「イタリア紀行」というものを非常に愛読しました。

ゲーテの「イタリア紀行」は現在でも皆さんお読みになることをおすすめします。というのは、私は美術というものに接するときの一番大事な態度が、この本に書かれておると思うのです。

とにかく私の学生時代は、何よりもまず古典的ギリシヤ、ローマに行ってみたい、自分の目でギリシヤ、ローマの芸術というものに接してみたいと思っていました。これはいま申しましたように、私自身の青年時代の教養と学問の方向が、ほぼヨーロッパ一辺倒に傾いておりましたから、当然の帰結であったと思います。

そんなわけで私は、写真で日本の仏像を見る機会はしばしばありましたが、何らの興味を持たなかったのです。それから万葉集はすばらしい日本の古典であるといふと幾ら言われても、万葉集を読んで興味を感じたこともなかったのです。万葉集を読むよりはハイネとかゲーテの詩のほうがおもしろかったし、日本の源氏物語を読むよりはドストイェフスキーのほうがおもしろかった。日本の三味線とか太鼓よりはベートーベンの音楽のほうがよかったです、すべて私の魅力というものは全部西洋に向けられていたわけです。これは私の大体二十代がそうで

す。

しかし実際問題として、私自身外国へ行けるわけではないし、とにかく自分の国の歴史の奥行きの高さというものに目を向けなければいけないのじゃないか、とにかく日本自体の中にギリシヤ、ローマというものがあるはずであると考えて、そして何も調べないで——そのころは和辻哲郎博士の「古寺巡礼」という本が一冊だけありました。それから会津八一先生の「南京新唱」という有名な歌集も出ていたわけでありますが、そのときは私はまだその歌集は知らなかったわけので、とにかくまず何と

いうことなしに奈良を訪れたわけです。

そのときから満二十五年たちまして、春と秋にはいまでもしばしば行くのですが、有名な百済観音とか、中宮寺の弥勒菩薩、あるいは、薬師寺の三尊とか、皆さんが奈良においてになると、おそらく一番先に心をひかれるであろうこれらの仏像に接したときに、私の心の中に一つの小さな革命が起ったわけです。

それはどういう革命であるかという点、私はギリシヤ、ローマの彫刻を見ると同じ態度で、いわば日本の古い美術というものを見物しに参ったわけで、そのつもりで仏

像を美術品として観察したわけです。それはいわば芸術的態度であつたと思ひます。しかし実際に見ているうちに、それだけの態度で一体いいのか、と自問しました。仏像というものは本来礼拝の対象であつて、美術ということばが使われたのは、私の記憶では明治以後ですし、仏像を美術品の対象とするということはありません。ことです。

そのときから、いまでも私の心の中に動揺した形で存在しているのですが、それは芸術と宗教という根本問題です。

私は、一度書いたことがあるのですが、五つの違った気持で仏像に接することがあるのです。そのうちの一つは、仏像が一個のただ仏であり、礼拝の対象であって、それに限るべきであるという純粹宗教的な立場です。二番目は、東洋の彫刻であって、ただ美的観賞の対象にすべきであり、またそれに十分に耐え得るところの第一流の芸術品である。何よりもまず芸術作品である。第三は、仏像は拝むものには違いないけれども、しかしこれは美的要素において拝むものであるという美と宗教との入りまじった考え方があつたのです。第四番目には、仏像は美

しい。美しくなければ礼拝しようという気持が起こらない。みにくい仏像を一体拝み得るものかどうか、つまり、美への礼拝という気持もあります。それから五番目には、どういう拝み方をして、拝まなくても、仏像は、仏自身の性格からいえば、自分を仰ぎ見たすべての人間を撰取する。この五つの気持がいまでも私の心の中で動揺しているのです。

これを私は今度過去の歴史に当てはめてみまして、それならば初めて仏教を受け入れた当時の人々が、あるいはその後長い歴史を振り返ってみて、われわれの祖先は

仏像をどういうふうに見たのか、またなぜ仏教というふうなものを受け入れたのかという、かなり根本的な問題にまで私は立ち入ってみたい。その後ずっとそういうことを勉強してきたわけです。

日本人の美と信仰という問題を、特に仏像と復原力ということにしぼって私がお話ししようと考えたのは、いま申し上げましたような気持が私の心の中にずっと続いてきたからです。仏像本来の姿において、そのあるがままの昔の状態にこれを返してみても、そして古人が一体どういう気持で礼拝したのか、どういう心理状態のもとに

仏というものを受け入れたのか、これは千二、三百年たつていますから正確にわかりかねることですけれども、しかしこれは仏像だけでなく、すべて歴史に接する場合に、いつでもまだ発掘されていない古墳の前に立つ覚悟が必要だと思えます。

御承知のとおり、古墳はあちらこちらで発掘されて、その中から貴重な品物が取り出され、いろいろ研究上の重要な参考になることは、皆さんも御承知のとおりであります。精神の古墳というものがありました、たとえば一つの仏像であっても、それはどういうふうにしてで

き上がって、どういう様式であるかということとはわかり
ますけれども、昔の人がどのようにそれを拝んだかとい
うところまで考え詰めていきますと、まだまだわからない
いことが一ぱいあります。

万葉集の歌でもそうです。万葉集の一首の歌の解釈そ
のものは、今日では非常に進歩しており、研究も深まっ
ていますけれども、それならば、いまから千二百年前の
人が、どういう調子でそのとき歌を歌って、その歌を歌
ったとき、彼らはどういう顔つきをしていたかというと
ころまで推察していきますと、わからなくなります。し

かしそういうわからないことを私は精神の古墳と呼んでいます。そのわからないことの前に自分が直面して、精神の古墳を発掘するという努力が、仏像にしても万葉集にしても、それに接する基本的な態度ではないかと思うのです。

それで私は、こういうことから考えてみたのです。いまのように仏像は、もちろん拝めばいいので、美的観賞の対象にするのがよくないという気持が一方にある。しかし実際に見ると、やはり非常に美しいですから、芸術品としての感動というものを消すわけにはいかない。大

きくいうと、宗教と芸術という二つのものが、私の心の中で相乱れるというありさまなのですが、こういう場合に一番根本のところにかえってみる必要があると思うのです。

そうしますと、仏教が入ってきたときの第一義の道は一体何か、一番根本は何か、それはいま残っている文献では聖徳太子の十七条憲法の第二条、つまり「厚く三法を敬い」これだけです。三法というのは仏法僧、つまり釈迦が説いた法、お経です。それに従って修行し教化する僧。ですから厳密に考えますと、お寺も仏像も不要で

す。釈尊の歩いた道を振り返ってみると明らかでして、いろいろ教えを説き、あるいはまた釈尊の教えを聞き、それに従って修行し多くの人々を教化するためには、ごく貧しい、生活に耐える小さな集団か、ささやかな小舎があればいいわけで、何も大寺院を建てる必要はない。これは鎌倉仏教の人たちは、全部この立場に一応かえったということとはあとで申し上げます。

ところが日本の仏教伝来の状況を見ますと、第二義的の道が非常に拡大されています。壮麗な寺院を建てる、すぐれた仏像をつくる、さまざまな仏具をつくる、盛大

な儀式を行なう、お坊さんの服装も非常にみごこちである。また、そこにいろいろ階級もできる。日本仏教伝来の一つの特徴は、この第二義の道が中心になっていたのでないか。つまり造形能力が非常に発達したということである。

ただ第一義の道は歴史に残らない場合も多いのです。大昔を振り返ってみて、万葉集なら万葉集について考えてみても、四千五百首のうち二千三百首、過半数は読み人知らず、作者不明です。実にすばらしい歌を残しながら、作者自身の名前が伝わらない。これは信仰の場合も

そうです。名前が伝わっている偉いお坊さんよりも、もつとすぐれた民衆がいて、名僧以上の深い信仰を抱いていたかもしれないけれども、その人は何も表現せずになそのまま死んでいったわけです。

歴史の中にはそういう無名の、しかも非常にすぐれた人々がたくさん埋もれているということが言えると思います。非常に厳格に修行し、厳格に経文を学んだ人たちもいたであろうと思いますけれども、そういう記録はほとんど消えてなくなってしまう。

ただ現在私たちが目の前にながめ得るところを通して

いうならば、古代日本人の仏教の受け入れ方というのは、第一義の道よりは第二義の道のほうがはるかに巨大であった。いまはほとんど廃虚と化して礎石ばかりでありませんが、飛鳥地方にはりっぱなお寺がたくさん建っています。したし、現在法隆寺、薬師寺、東大寺、あるいは藤原氏の氏寺である興福寺など、古いものの代表として残っています。それが以前にまだまだたくさんのお寺があったことは、歴史にも記録されています。聖武天皇時代に、日本は仏教国家になったわけにして、日本全国六十八カ所に国分寺、国分尼寺というものを建立したわけ

で、その総国分寺が、つまり東大寺ですが、いまは全部
廃虚です。一つも残っていない。いま私たちがすばらし
いとか美しいと言っている仏像は、おそらくその何千倍、
何万倍あっただろうと思うので、その中のほんのわずか
がいま残っているだけで、つまり天平時代中心の日本人
の造形能力というものを振り返ってみますと、実に驚嘆
すべきものです。しかも純粹に仏教信仰の立場からい
うと、第二義的の道であったと私は思います。

このことにはある意味で日本人の性格とも関係がありま
す。またその当時の日本の置かれた状況とも関係があり

ます。それはどういう状況かといえますと、三つあります。そのうちの一つは、日本に仏教が入ってきたとき、それはインド、中国、朝鮮を経て、最後に伝来したわけですから、造形面でも相当すぐれたものが、もうすでに大陸において発達していた。その影響を受けたというところが、一つの理由として考えられます。もう一つは、仏教伝来といえますけれども、正確にいえますと、これは古代における文明開化でして、七世紀から九世紀の三百年間は、日本が中国、つまりその当時の唐文化を全面的に受け入れた時期です。入ってきたのは仏教だけではな

いわけで、その他さまざまな書籍も入ってまいりましたし、新しい生産技術、造形技術、薬品その他のさまざまな物産、遣唐船というのが、当時の貿易船でもあったわけです。ちょうど明治に国を開いて、それまで私たちがほとんど知らなかった西洋の新しい文化、技術、新しい改革が一挙に日本に入ってきたような状況と、同じではないですけれども、そういう状況のものとしてお考えになる必要があると思うのです。

ただ仏教だけが入ってきた、すぐれた経文とお坊さんが来たというのは一面にすぎないのでして、新しい技術

を伴った巨大な技術革命が行なわれた文明開化であった。ですから、そのころのお寺も、今日われわれが考えるお寺とはずいぶん違い、宗派というものがまだ存在していません。法隆寺は法隆学問寺といって、今の総合大学の性格を帯びていました。経文を習うということが基本ですけれども、おそらくそこに集まった人々は新しい技術も学び、また薬品を調合する方法も学んだのであるうと思われるわけです。むしろその当時の青年が中心で、古代の寺院というものは、その当時の知的な好奇心に燃えた青春のエネルギーの結晶であったと言っていると思

います。

今日私たちは、お寺とか仏像という古いという感じを受けますけれども、その当時においては法隆寺、薬師寺、東大寺というものは最も新しい学問の殿堂であり、そこに集まった人々はみな若々しい人々です。そして唐の文化の影響を強烈に受けた人々であったので、そういう中におけるお寺とか仏像というものを、復原してお考えになる必要があると思うのです。

それからもう一つは、日本人の美意識——私は日本歴史をずっと振り返ってみるたびごとに思うのですが、日

本人の彫刻、絵画、建築、工芸等にあらわれた造形面における美意識というものは、昔から非常に発達していたと思います。唐の影響を受けていきなり大きなお寺を建てたように私たちは考えますが、それ以前に出雲の大社のような木造による大建築をつくり得る能力を持っていたわけです。そこに仏教が伝来して新しい技術も入ってきたわけで、何よりも当時の人心に強いショックを与えたのは、色彩の革命が行なわれたという事です。

いまでも神社をござらんになりますと、色が全然塗っていない、素朴な材木だけで組み合わせ、それがまた非常

に素朴で美しいものです。ところが、お寺は全部赤とか緑とか黄色とか、そういう色でぐってぐってと塗られている。そして中に入ると、金色でさん然と輝いた仏体が安置されている。いまわれわれが考えるよりも、はるかにけばけばしいけんらんたるものであったと思う。それを初めて見た古代日本人は、そのことに非常に強い衝撃を受けたと思う。それ以前は神ながらの道で、いろいろ興味深い神さまが古事記の中に出てまいりますけれども、どういうわけか、われわれの祖先は、その神さまを造形化する力を欠いていたのです。

私はいまでもこれは非常にふしぎに思います。埴輪は
仏像伝来以前につくられたのですが、たとえば大国主命、
日本武尊、その他古事記をごらんになると、実に活動的
で行動的で、おもしろいギリシヤの神々のようなさまざ
まな神さまが出てまいります。それを彫刻化しなかつ
た。平安朝に神像というものができましたけれども、数
はほんのわずかであり、できも悪い。ところが仏像が入
ってきて、仏像といってもさまざま如来像、菩薩像な
ど、いろいろなものが入ってきたということ。同時に
日本人の芸術上の創造力を刺激したと思います。色彩の

革命がおこったことと創造力の飛躍したこと、それが日本人の美的能力を刺激して、ああいう古代の寺院のような強烈な造形能力となってあらわれたのであろうと思います。

つまりインド、中国、朝鮮等を経て、最後に日本に仏教が伝来してきた、相当成熟したものが入ってきたことと、それから仏教伝来というけれども、ほんとうは文明開化で新しい文化が全面的に日本に流入してきて、われわれの祖先はそれを消化しようとして大いに奮闘したということ、それから日本人自身の美意識が刺激されて、

色彩の革命と創造力の飛躍が起こったということ、こういうようなことが、いま振り返り、特に造形面、本来の仏教信仰からいうと第二義的な性格を持つものが、あたかも第一義的なものであるかのように取り扱われるようになった、その原因であろうと思うのです。

しかしもう一つ大事なことがあるのです。なぜ一体仏教を受け入れたのかということ。その前に神ながらの道というものがあつたのですが、神ながらの道というもの、その性格は、きょう詳しくはお話し申し上げられませんが、なぜ日本人は仏教を受け入れたかといま

すと、それは新しい文明開化であつたからということは一つの理由になりますけれども、一番重大なのは、新しい宗教にしても、またその他思想の問題でもそうですが、すべてそれを受け入れるときの動機には、必ず恐怖というものがあるということです。歴史をござらんになりますと、私は人間の歴史は恐怖の歴史だと思つたのです。日本最古の歴史である日本書紀を読んでみますと、さまざまな恐怖が描かれています。私はそこから次のようなものを拾い上げてみたことがあります。それは内乱、殺人、陰謀、洪水、地震、干ばつ、疫癘、天然痘、ライ、飢餓

と貧困、この状況はずっと続きます。

今日のわれわれから見ると、疫癘とか天然痘とかライ
病というものは、医学的に克服されていますけれども、
しかしその当時、一たん疫癘がはったり天然痘がはや
ると、何千人、何万人の人間が死んでいく。それから洪
水、地震、干ばつは天災でありますけれども、そういう
ものに絶えず襲われている。そのほかにも内乱とか殺人
とか陰謀が続いてきている。どの時代を振り返ってみて
も、人間の歴史というものは恐怖の歴史で、一つの恐怖
が消滅すると別の恐怖があらわれてくるということが、

人類史の特徴じゃないかと思われるほどです。仏教信仰にしても、キリスト教信仰にしても、あるいは共産主義の場合でも私はそうだと思いますが、それを受け入れることの根本には、いま申しましたような恐怖をいかに克服するか、恐怖との格闘とそこからの脱出の願いというものがないければ、新しい宗教も新しい思想も、これを受け入れることはできないわけです。古代の日本人はこうした恐怖の過程の中で仏教を受け入れたわけです。

先ほど申しましたように、文明開化という要素があり、造形面では非常に発達したけれども、なおその一番奥底

に、いまお話ししましたような恐怖観念がある。ですから古代の仏教においては、何よりも祈禱が第一です。たとえば内乱、殺人、陰謀が起こる。そうすると国家安泰、大和朝廷の安泰を祈って、しきりにお坊さんが祈禱をささげる。それから何よりもおそろしいのは病気で、その病気をなおすというのは、純粹の信仰からいうと非常に功利的な面を持っていきますけれども、しかし人間というものには病気になれば、病気をなおしたいと思うのが当然で、そこに新しい薬が入ってきたわけですが、その薬と仏像が密着していたと思います。

よくいわれることですが、薬師如来がこの場合しきりに拝まれたと思う。いまの薬師寺の薬師三尊、あるいは法隆寺のずっと前の本尊といわれる薬師如来も残っています。左の手の平の上に薬つぼを載せているわけで、いまわれわれが感じるのと非常に違うので、おそらく疫癘になったり天然痘がはったりライ病などになった場合には、心から薬師如来を拜んで、それは拜むということと同時に、新しい薬を受け入れて、それによって何とかして病気をなおそうという深刻な願いが、根本にひそんでいたのであろうと思います。

ことにライ病は人間のかかる病気の中で最悪の悲惨なもので光明皇后の伝説の中に、光明皇后がそのライ病患者を救うために湯殿をつくって、みずからその背中にお湯をかけて流してやったという伝説があります。キリスト教の場合にもバイブルを読みますと、キリストがライ病病みの頭に手をやってライ者をなおした。

ですから最低最悪の最も悲惨な病気をなおすことは、キリスト教の場合でも仏教の場合でも、宗教的願いのかなり大きな部分を示すものであるということを示しているのです。ライ者への愛が宗教的愛への一つのクライマ

ツクスであつたと言つていいかと思ひます。そういうふうに外形的な文明開化というものもあるけれども、内的に歴史を調べてみると、いまのような恐怖がある。そしてそういうものから脱出しようとして祈禱するわけです。

皆さんが薬師寺とか東大寺とか法隆寺においでになつたならば、つまり私の言う復原力を發揮してごらんになると、興味深いと思ひます。いまの法隆寺なら法隆寺は建物も古びて、主として観光の対象になつていますけれども、しかしあの周囲にライ病病みがたくさんいて、そ

のころまた天然痘でもはやっていた場合には、幾人もの人間が金堂の中にひれふして仏像に燈明をあげて、五十人とか百人のお坊さんが読経して、その燈明とお経を読む声の非常な不可思議な神秘的な状況の中に、自分自身を自縛させていくという一つの魔術的な効果がおそらくあったであろうと思う。こういうことは私の想像が半分入っているもので、事実どうであつたか正確にはわかりませんが、んけれども、しかしおそらくは必死の祈りがそこにささげられていたであろうというふうに私は思うのです。

ところがもう一つ根本の問題が次に出てきます。大き

なお寺を建てて、新しいお薬も来たし、すばらしい生産技術も伝来した。ではそれによって人間というものは救われたかどうかという問題です。

これほど大きなお寺を建てて、その当時の財政状態からいったら、これは非常に困難な事業であったと思います。全国に六十八カ所も、いまの法隆寺程度のお寺を建てたのですから、その当時の財政の負担は、非常に大きかったと思います。そのことは日本書紀にも書かれていますし、平安朝になってもこの国分寺をどう維持しているかということとは、国家財政の上においてたいへん困難

です。その上に貴族がまたやたらにお寺を建てる。またやたらにお寺を建てたおかげで、今日仏像やお寺が残り得たわけで、その点は感謝していいと思います。しかし、何のためにあんなに大きなお寺を建てたのか、ちよつと想像に苦しむのですけれども、そのことは、つまりは古代人の恐怖がいかに深刻であったかということのあらわれとっていいかと思えます。恐怖が大きければ大きいほど、それを克服しようとして大きなお寺を建てる。私はそういうふうに想像しています。ところが人間はそれでも救われぬ。

そこで初めて、人間とは何かという問いが出てまいります。それを一番最初にはっきり言ったのが、聖徳太子の十七条憲法でありまして、つまり非常にすぐれた大きな建築、それから彫刻、絵画、実に壮麗なお寺を建てて、そしてなお人間の救いというものはあり得ないのだからかという疑問を持ち出したところから、古代日本人の精神生活の黎明がきたといっている。その場合二つ重要な答えが出てまいります。

そのうちの一つは十七条憲法の第一条でありまして、これは皆さんも御承知のとおり「和をもって尊しとなす」

ということばで始まります。人間とは何かという問いに對して、第一条ではこう答えております。「人みな党あり、また悟れるもの少なし」。人はみな党派的なものである。悟れるものは少ない。これをその当時の政治情勢において考えてみますと、その当時の政治的実権を握っていたのは、蘇我馬子一族であります。その他大氏族がそれぞれ派閥をつくって争って内乱を起こしたり、陰謀をたくらんだり、人を殺したりしているので、これは仏教もキリスト教でもそうです。

蘇我一族というのはこの当時における最大の信仏派で

す。仏教を最も尊敬した大氏族です。自分の政治力、経済力をもって大寺院を最初に建立したのですが、一方でお寺を建てながら、他方で陰謀をたくらんで人を殺しているわけです。

すべての宗教の第一の教えは、人を殺すなかれということですが、人を殺すなかれという戒めを口にしながら、残虐な殺人を行なうということは、私は人類の最大の矛盾だと思ふ。キリスト教の歴史を振り返ってみても、仏教の歴史を振り返ってみても、仏教徒と仏教徒が仏の名を呼んで殺し合っている。キリスト教徒とキリスト教徒

とがキリストの名を呼んで殺し合っている。こんな激しい矛盾はない。人間とは何かと問うた場合に、まず聖徳太子の目の前にはつきり写ったのは、この人類の大矛盾ではなかったかと思えます。その根底にあるのは党派、派閥だ、人間というものはどうしても派閥をつくりやすいものである、悟れるものまた少なし——まず人間とは何かに対してこういう答えをしています。

もう一つはやはり十七条憲法の第十条でありまして、人間とは何かという問いに対して、「人みな心あり」と答えています。われわれみな心というものを持っている。

心とは何か、執着だ。「心はおのおの問うことあり。彼善^よしんずればわれすなわち悪しんずる。われ善^よしんずればすなわち彼悪しんずる。われ必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず。ともにこれ凡夫のみ。是非の理だれかよく定むべし、相共に賢愚なることゆみがねのあしなきがごとし」

つまり人間の判断力というものは相対的なものであって、絶対性は持たない。私が正しいというと、彼がそれは間違っている。彼が正しいかというと、私がそれは間違っている。どっちが正しいか、一体だれが判断するか。

われわれの場合、普通自分はりこうな人間で相手は愚かな人間であると思うけれども、しかしそうではない。われ必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、ともにこれただ凡夫にすぎない。だから、だれが正しいかということをどうして定めることができるか。われわれは自分というものに執着するからだ。心というものは執着である。絶えず自我というものに固執して争う。人間というものはそういうものである。

これは、わが古代における人間研究の最初の表現なのであって、だから、三法によりまっつらば、何をもって

か曲がれるを直せぬ、だから仏教を信ずる必要があると
いうことを、この聖徳太子は言われているわけです。

とにかく仏教仏教と言いますが、一体それがど
んなふうにして伝来して、どういうふうには拝まれて、ど
ういう意味を持ってきたかということ、やはり私たち
歴史の中に深く自分の身を投げ入れて、それを学ぶ必要
があると思うのです。私は非常に概観的なんです、わ
が国の仏教が伝来した状況を一つの方法にして、私の言
う復原力というものをできるだけ働かせてお話ししてみ
たのです。

こういうことが平安朝までずっと続いてきまして、そして現在方々に残っているみごとなお寺や仏像が、次から次へと出てきたのです。私は一番最初に、これは仏教を受け入れるときの第一義の道ではない、何も大きなお寺や仏像をつくる必要はないということを申し上げたが、この自覚が明確になってきたのが鎌倉時代です。

鎌倉時代の宗教改革というものは、法然、親鸞、道元、日蓮、一遍あるいは明恵というふうな人たちによって行なわれますが、鎌倉仏教における宗教改革の第一声は法然上人があげたのであって、その法然上人は四つの面を

否定しております。一つは造像起塔の否定、寺仏像を全部否定する。その次は地位、豊才の否定、地位があつたり才能が豊かであつたりすることを否定する。その次は多門多数を否定する。教養を全面的に否定する。その次は戒律を守つたり戒律を持つことを否定する。これは既成仏教に対するたいへんな革命的なことばです。

つまり奈良を見ても京都を見ましても、壮大なお寺が一ぱい建っている。それを全面的に否定する。信仰の真のためにはそういうものは要らないというのです。やれ自分が地位があるとか才能がある、そんなことは意味が

ない。いろいろなことを知って教養が高い、そんなことも意味がない。この三つの点は親鸞も道元も日蓮も全部一致しております。ただ一つ、戒律を守ることとも否定するということは、仏教上の大問題であって、これは非常な紛糾を起こすので、この問題はここでは申し上げません。

とにかく一番仏教信仰の純粹な形に帰ろうとしたのが、鎌倉仏教の僧士たちで、ああいう人たちから見たならば、法隆寺でも薬師寺でも唐招提寺でも、あんなものはなくてもいいと言ったに違いない。現にそう言ってい

るわけです。

たとえば道元の「正法眼蔵随聞記」の第三を読んでみても、こういうことが書いてある。「当世の人は多く造像、起塔等のことを仏法興隆と思い」、像をつくったり塔を建てたりするのが仏法が盛んになることだと当世の人は思っているけれども、「また否なり」そんなことは絶対にない。「たとえば講堂大館玉をみがいて黄金を延べたりといえども」大きなお寺を建て、りっぱな塔を建て黄金をそこに敷き延べても、これによって道を得るといふことは絶対にないのだ。ただ草のいおり、木の下であ

つても、法門の一句を忠実に勉強して、そして座禅を組むことこそ、まことの仏法興隆というものである。これは法然も同じことを言っているし、親鸞もその道をたどってきています。こういう強烈な既成仏教に対する抵抗力というものが、造形の否定となってあらわれてきているということとは非常におもしろい点です。

私が初めて奈良に行っていきなり直面したのは、宗教と芸術の問題だといいましたが、厳格な宗教的信仰からいうと、すべての造形芸術と文学というものが否定されなければなりません。しかしそれを否定されては困るの

です。芸術の魅力、文学の魅力というものは、いかに否定しても否定し切れないものがあります。そういう面から古いお寺や仏像に接するということも、むろんこれはあり得るわけです。その両方が矛盾してくるのですが、そういう心の中の矛盾を、やはり鎌倉仏教のすぐれた祖師たちは内的に経験しています。

道元は文学も否定しています。しかしこの時代において最大の文学的才能を持っていたのはほかならぬ道元です。すべて文学は虚構の世界です。芸術も虚構の世界であって、純粹の信仰のためにはむしろさしさわりになる

という考え方が、キリスト教の場合にもありますが、そういう心の戦いというものを、鎌倉仏教の人たちが経験していたということは、私は非常に興味深いと思います。

ですから皆さんが奈良に行って、古いお寺やすぐれた仏像をごらんになって、皆さんの美意識を高めることは非常に大事なことですけれども、純粹な仏教信仰からいうと、それを否定する人もいたということも、私たちの心の中に入れておく必要があると思うのです。

ここで日本人のものの考え方に二つの型があるということ、いまのお話からふえんしてみたいと思います。

それは奈良仏教から平安朝にかけて、実に多くのお寺ができ、すぐれた仏像や仏画ができ上がって、造形芸術面における日本人の才能が頂点に達したといっても過言でないほど、すぐれたものができ上がったわけです。それを私は仏教を受け入れるときの第一義の道とは言えない、第二義の道であるといいましたが、それはそうではないので、この第二義の道も第一義の道に包括されるということを説いたのが弘法大師です。

弘法大師の密教というものが非常に重要な意味を持っています。これは平安朝の古いお寺や仏像をごろんにな

るときは、必ず皆さんが直面する問題だと思えます。

弘法大師の密教とは何かということをも、私はとても簡単に申し上げることはできませんけれども、弘法大師が心の中で信じていたのは大日如来です。一種の太陽神で、宇宙の全生命の秘密というものをつかさどるといえるか、宇宙の秘密の象徴化といってもいいかと思えます。ですから、すぐれた仏像だって、それは同時に仏の心のあらわれです。またすぐれた絵画であっても、その他すべて造形芸術そのものが、大日如来の秘密の表現です。

それからわれわれ人間も個人個人は、たとえばどんなに

小さく貧しくとも、やはり宇宙の大生命力の一部分なの
ですから、大日如来というものはわれわれ個人個人の心
の中にも存在するものです。大宇宙あるいは大自然の秘
密の中に入り込むということが、弘法大師の行になりま
すから、したがっていろいろな種類の経文、あるいはい
ろいろな造形芸術をすべて総括的に、この世の中のあり
とあらゆるものが、大日如来の壮大な生命力の中におさ
められ、同時にまたその表現であるというふうな考え方
をいたしますから、弘法大師においては宗教と芸術とは
一致いたします。

たとえば京都の教王護国寺、当時の儀式をごろんになるとわかります。密教ですから護摩をたきます。そしてお堂の中で護摩をたきますと、その火の炎によって周囲の仏像が全部動き出すわけです。これは話は飛びますけれども、ロダンが自分の彫刻を觀賞する場合、電気を消してローソクを持って彫刻のまわりを回って、その彫刻の深さ、生命力、神秘感というものが、ローソクの光によって非常にあざやかにわかるということを書いていますが、密教の儀式というものは、そういう芸術的要素を濃厚に持っています。

そしていま言いましたように、森羅万象何でもこれを受け入れて包括しようという傾向を持っています。このことが日本人の性格に合ってきている。どういうふうに合わせてきているかという点、鎌倉仏教の場合には、信仰というものが非常に純粹化され、単一化され、法然上人は南無阿弥陀仏、そこに集約されている道元はただ座禅、日蓮は南無妙法蓮華經というふうには、信仰が純粹化されますと、究極のものはきわめて単純明快に表現されるのです。

ところが日本人の信仰の歴史を振り返ってみますと、

雑宗といいまして、たった一つの宗教だけ、一つの教えだけを信ずるといふ人は比較的少ない。あれもこれもいろいろなものも信ずる傾向があります。

たとえば有名な歌人の西行は、弘法大師を非常に尊敬していたのですが、密教の行者です。しかし同時に法華経を非常に尊敬しています。神社の前を通るとちゃんとおじぎして、神社に対して礼拝者の立場になります。西行という名前からもわかるように、浄土教もまた尊敬している。これは平安朝時代の比叡山などの八宗見学と申しまして、いろいろな教えを総合的に勉強してきたので

ありますが、このことは仏教だけでなく、日本人のものの考え方を皆さんがお考えになる上に非常に参考になるものだと思います。

いまの私たち日本人の信仰を振り返ってみても、このことは言えます。いまは習慣化してしまい、その点について思索が深められなくなりましたけれども、一方で仏壇を置いて他方で神だなを置く。それから何か病気で、よく下町の人などは病気で浅草の観音さまにお参りして、それからどこか金比羅さんにお参りして、湯島の天神さまにかけつけていく。まだきかないかと思ってお隣

の毘沙門さんを拝むというふうには、庶民の信仰というものは、やはり非常に大事です。ほんとうに自分が貧乏になつたり、病気になつたりしますと、あちらこちらに願をかける。観音さまなら観音さまだけ一つに願をかける人もありますけれども、それがきかかないとなると、あちらこちらにやります。これは雑宗の影響です。

われわれでもそうです。マルクス主義も少し知って、仏教も少し、ドストイェフスキーも少し、何でも少しずつ知っており、徹底的に一生をかけて一つのを信ずるといふ傾向から遠いのです。ある意味では芸術的な性

格を持つ民族であるところからもきています。これを私は密教型思考と呼びまして、日本人の歴史を振り返る一つの特徴として考えています。

鎌倉仏教の人たちは、いま言いましたように非常に純粹化したしましたけれども、そのころの影響を振り返ってみると、南無阿弥陀仏を唱える人もあれば、南無妙法蓮華経という人もありますから、何だかわれわれの信仰の内容を考えると、神ながら、やおよろずの神々というもの、八百万もいたのですから、その伝統もあるかと思いますが、密教型思考というものがずっと続いていっ

ています。

いろいろなものを雑多に受け入れる、これは明治以後の文化を振り返るときでも、その根底にいまのような密教的思考の伝統があったのじゃないかと思われるほどです。私はもう少し勉強してみないといけない点なわけです。けれども、一つの問題として皆さんにもお考えいただきたいと思います。

もう一つのもの、この考え方、これを私は流離型思考と呼んでいるのですが、これはどういうことかと言いますと、いまの仏教伝来と関係があります。先ほど言いましたよ

うに、仏教が入ってきてきて大きなお寺や新しい美術やすばらしい仏像ができた。とするならば同じ時代に生きていた万葉の人々が、どうしてこれを歌わなかったか。万葉集全体を読んでみて信仰告白の歌というものは一首もないのです。これはおかしいと思う。おかしいのか、あるいはまたこういう形が当然であったのか、つまり同じ人が、たとえば聖武天皇なら、聖武天皇は東大寺を建立して、大仏造建のみことのりを発して、奈良朝における最も信仰深い天皇であり、仏教徒であったわけです。万葉の歌を見ますと、そこには一つも歌っていない。全然別

なことを歌っている。そうすると仏教を受け入れてはみ
たものの、その仏教信仰というものをまだ消化し切れな
かったのか、あるいはその当時の人たちから見ると、た
いへん新しい外来思想ですから、その外来思想を日本の
伝統、伝来の歌の形式で当てはめていくことがきわめて
困難であったのか、その辺のことは、これも私は勉強し
てみなければちゃんとしたことは言えないのですが、た
だどういう面から仏教を万葉の歌の上で消化していった
かという点と無常感です。

たとえば人麻呂歌集の中に「まきむこのやまべとよみ

ていくみずのみずあわのごとしよのひとわれは」。水の
流れの中に浮かんでいるうたかたにたとえた、こういう
形の無常感、あるいは大伴旅人の「よのなかはむなしき
ものとしるときしいよよますますかなしかりけり」とい
うふうなむなしさのあらわし方、あるいは、大伴家持の
「うつせみはかずなきみなりやまかわのさやけきみちす
みちをたずねな」これなどは、仏教信仰を求めたいとい
う気持が比較的出ています。けれども、その後の中世の
歌のように、自分の信仰を歌ったり、それから阿弥陀如
来をたたえたりするような歌は、万葉集には一首もない。

ただ受け入れ方は、無常感という面から受け入れて——どうもこれは仏教が入ってくる以前からそうですが、日本人は人生の無常を水の流れに託するという傾向が、昔からあったようです。たとえば古今集の「よのなかはなにかつねなるあすかがわきのうのふちぞきよのせになる」それから西行は「ながれゆくみずにたまなすうたかたのあわれあだなるこのよなりけり」。それから今度は方丈記の「行く川の流れはたえずして、しかももとの水にあらず」ああいうところに展開していくわけにして、流れるという形をとる。

これを私は流離型思考と呼んでいる。仏教が入ってき
てからも無常感だけが仏教ではないのであって、無常感
の根本には、常時真実なるものの仏性、仏がある。無常
感は半面にすぎないのです。その半面である無常感を感
情化して無常哀観あるいは無常美観というふうには、次第
にこれを美意識に転化していく傾向を持っているので
す。

自分自身は旅人として世の中をさすらう。家というも
のはかりの宿にすぎないものである。そういう西行から
芭蕉に至るまでの生き方は、一ところに大きな家をつく

ってそこに住みつくことをむしろ否定する流離の形態をとる。こういう無常感があわれという感じになって、悲哀の色を非常に濃くしていく。そこにしまいには江戸時代になりますと、あきらめという観念も入ってきたと思うのですが、日本人のものの考え方には密教思考と流離型思考と二つあるように思われます。

ここで、今度は現代に関してまいりますが、こういう問題が出てきます。いきなり西洋、フランスの人の話になるのですが、私はいろいろ美術について書かれた本を読んでいて、外国人の中で尊敬している人が二人いるの

です。それは一番先に申し上げましたゲエテで、その「イタリア紀行」は、岩波文庫で非常な悪訳ですけれども、いま出ています。

それともう一つはフランスの哲学者で詩人で、日本でも出版しても売れないのでだめなんです、ヴァレリーという人で、その「博物館の問題」というのが私はとても好きです。

つまりいま私たちは、博物館あるいは美術館に行かなければ、古い美術を見ることができない。古い美術を保存しておくためには、博物館とか美術館というものは絶

対に必要であつて、どこの国に行つてもそれはある。それはたいへんありがたいことだけれども、そこに一つの大きな疑問があるのではないか。

ではどういふことかといひますと、そこに陳列されてゐる仏像は、かつてはどこかのお寺の金堂なら金堂に安置されてゐたものです。またそこにかけてある絵は、かつてはどこかの大名の屋敷の床の間にかけてゐたものである。またそこに並んでゐる茶わんは、昔はそれによつて、ある人がお茶を飲んでゐた。みんな日常の精神生活とか、日常生活に密着してゐたものであり、同時に

建築というものがなければ、その他の造形芸術というものは、生命力を持たなくなることがあります。ところが、その母親である建築が焼けてしまって、残ったものが博物館に収容されているのですから、博物館とか美術館というものは、ある意味では美の孤児院である。母親に捨てられたみなし子である。

ですから博物館というものは、あれがなければ困るけれども、一つの危険を私たちに迫るということを、ヴァレリーは言っているわけです。

つまり私たちは確かに仏像なら仏像を見たと思ってい

るのだけれども、それがあるお寺の金堂の中で礼拝された状態において、その仏像が初めて生命力を發揮しているわけで、そういう歴史的事実、あるいは復原力を抹殺して、博物館でガラスのケースを通して仏像を見てわかるということが一体あり得るのかどうか。絵画でも茶わんでも、全部そういうものである。博物館がなければ困るのです。それ以外に保存場所がないから。しかしそこで私たちはいろいろなすぐれた美術品を見て、それでその生命力にじかに触れ得たというふうに錯覚してはならない。これは大事な問題だと思う。

いまの大和の古いお寺も博物館みたいなものになってきていますから、お寺と言えるのかどうかあぶないと思います。一種の観光対象になってきていますから、私たちがそこに行って、うかうかといろいろな仏像を見て、理解したと思うことの中には、いま申しましたような危険がひそんでいるのです。

もう一つ、それはあまりに広い学問を持つことはよくないということなのです。これもヴァレリーのことばですが、すべての芸術の分野において博識、いろいろなことをたぐさん知っているとすることは敗北である。博識という

ものは最も繊細でないもの、それをも無理やりに照らし出し、最も本質的でないものを一生懸命勉強したりする。たとえばビーナスの女神というものは、今日では資料と化してしまったと言っています。

つまりビーナスならビーナスについてのあらゆる研究が続けられる、それはとうといのです。研究しているうちにそのビーナスの女神が美の対象でなく、一個の資料に化してしまっているということは、今日の日本の歴史の共通の欠陥だと思えます。資料がなければ困るので、われわれは、文学をやっている人間がとかく文学的空想

におぼれて、勝手に文学的にゆがめますが、それは小説では許されても評論では許されないもので、正確な資料は絶対に必要です。厳密な学究精神というものは前提にしななければいけないと思いますけれども、そこに自分としての豊かな想像力が加わりませんと、ただ資料の山の中に埋もれてしまって、ただどこまでもこまかくなるので

す。
いまの歴史を見ていますと、私もそれは悪いとは言わない。しかしそうしているうちに歴史の対象というものを人間化せず、資料化してしまう危険が伴うのではない

いか。だからもし皆さんが芸術をおやりになるならば、あまりに博識にならないようにということです。これは先ほどもちよつと触れたけれども、法然が鎌倉時代に宗教改革を行なったとき、まず教養、学問、地位、才能を全面的に否定したということは、純粹な信仰に入るためにはどうしてもこれが必要です。宗教的にもそうですが、芸術の分野においても、あまりに博識であることは敗北です。これはこの逆説であると言っているかと思えます。

私などはこういうことばを聞きますと、すぐ勉強をやめて、見るだけで勝手にいい気持ちになって奈良はいいと

いうことを書きますけれども、それではいけないので、資料はやはり厳格に必要なんですが、ここの兼ね合いです。仏像だけでなく、すべての芸術を取り扱う場合の一つの警戒すべき点をヴァレリーは示していると思います。

いま言いましたようなことを土台として、よく仏像がわかるとかわからないとか、いろいろな絵を見てもこれはわからないとかわかったとか言いますけれども、理解とは何かということを最後に申し上げておきたいと思います。

何か絵を見て、私にはとてもわかりませんが、これは表現がちよつと間違っていると思うのです。わからないうじやない、全然関心がない、おもしろくないのです。わかるということは愛情を持つということが根本になります。そしてこれはどんな場合でも理解ということの内容を調べますと、五つの過程と言っているか、そういう要素があるのです。

そのうちの一つは、皆さんがすぐれた仏像でも、あるいは現代の造形でも、ひどく感動した場合はどういう状態になるかという、沈黙せざるを得ないので、沈黙

の理解というものがありません。ところが私たちは、口に出して言ったりペンをとって書かなければ、理解したと思わないという一つの錯覚を持っています。ほんとうの理解というものは、とても表現できるものではないのです。感動の深さ、一流の芸術というものは、すべて人間に沈黙を命じますから、とてもいいものに接すると、黙ってしまう以外にないのです。いろいろなふうになどは仏像をほめて説明してみたところで、一体それほどどの程度まで、その仏像なら仏像の持つ生命力を表現し得えているかどうか怪しいと思います。これが一つ。

もう一つは、それにもかかわらず表現したくなるのです。もちろんすばらしい芸術に接した場合は、黙って沈黙せざるを得ないけれども、同時にそれを表現したいという表現欲望は、いつまでたっても語り切れないものだということが二番目に言えることです。

三番目に、どうしてもわからない部分が最後に残りますから、そのわからない部分を最後まで心の中に保存しておく必要がある。音楽でも映画でも文学でも、何でもそうだろうと思います。皆さんがそれについて感動して何か書くやいなや、たちまちほんろうされます。ある一

つの芸術とか信仰に接することはほんろう関係に入ることであつて、こちらがめちやくちやに引きずり回され、また相手もこちらを引きずり回す。お互いにほんろう関係に入らされて、どうしてもいいやらわからない。そのわからない部分がかなり残る。全部理解したと思うことは、全然理解していないことと同じことです。

もう一つは、いまも言いましたが、文学的誇張に私たちはおちいりやすいのです。精密な学問があつて、その上に文学的才能があれば文句はないのですけれども、つい勝手な解釈をして、すべての文学以外の芸術について

語ろうとすれば、それとは違った文学表現、別の世界に入っていていきますから、今度は文学表現によって絵なら絵、彫刻なら彫刻を語るという特殊な技術がそこに入っていきます。ですから批評家が文筆で非常にほめたために、二流の絵が一流になるという場合がよくある、そういう危険もあります。

もう一つは、固定観念にとらわれてはいけない。奈良に行きますと、いろいろな仏像があつて、すでに定評とというのがあつた。自分の目で見ない。説明書きを見る。これはこういうものであるということをも自分の心にうのみ

にしてしまう。それは非常に困ります。文学的空想におぼれて、自分勝手なことを書くことも困りますけれども、既成の観念、あるいは定評というものに束縛されることも、やはり危険なことです。

いま言いました五つの要素というものが、古い仏像だけでなく、その他すべての芸術に接するときの基本条件だと思ふのです。

私は二十五年間ほど奈良をまわって歩いて、そして歴史を勉強したり仏教信仰に心を傾けてみたり、そうかと思ふと美の観念によって接してみたり、まだ私はよく心

がきまらないのです。仏教信仰に深く入ろうとするとき、鎌倉仏教の祖師たちのように、すべての仏像、造形芸術というものを拒否せざるを得ないところに追い詰められますと、私はとてもそこまではいきませんから、芸術的にもっと美しいものとして接したいと思います。そうすると厳格な宗教からいくと、それは許されないことになる。いろいろそういう困難な問題に縫着するのです。

皆さんもこれから奈良に行く、あるいは京都において、古く、古いお寺や古い仏像を見ることによって、ただ懐古趣味におぼれるのではなくて、現代にもなお生きる

困難な課題というものを背負わなければ、仏さんを見たいかいないと思うのです。幸いにいま新しい薬がたくさ
んできていますから、疫癘になった、天然痘になったか
らとって、仏さんを拝む必要はなくなってきた、病院
に行ったほうがいいのですけれども、しかしそれ以外に
古代人の非常に層の厚い精神生活というものが背景にあ
りますから、仏像をごらんになりまして、現在の自分と
そういうものと対決させてみて、安易な解決や理解は全
部やめてしまって、難問を抱くことが仏の慈悲というも
のであろうと私は思うのです。

よくわれわれは仏像を見ると言いますけれども、仏さんから言わせると、あいつら見にきたから、おれも見てやろうというふうなものがあるのであつて、向こうもこっちを見ていると思つて差しつかえないと思う。あの目をよく見ていると、向こうもこっちをよく見ている。あほうな顔をして研究に来たなと思つて見ていると思うのですが、見るのじゃなくて見られているということもあるのです。観物ということばに対して顕物ということばがあります。われわれは仏像を観ずる。それに応じて仏像が顕——あらわれる。仏像があらわれるということばは、

仏像の生命力自体が発揮されるということです。そのためにには私がいまお話ししましたような意味でも、復原力とか追体験というふうな経験が必要なのではないかと思うのです。

日本文学電子図書館

日本人の美と信仰

著 者：亀井勝一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：「日本人の美と信仰」

大和書房

1968年6月10日 初版発行

日本文学電子図書館